

ベンチの貴方に優しくキスして.....  
南海部 覚悟



メッサ- シュミット  
1959



①【9月20日、JR西日本福岡総合車両所、従業員食堂での男性作業員の会話。】

「それで、どんな女なんだいそいつ、若いのか？」

赤い豚骨ラーメンの丼を啜りながら、作業服の男が尋ねました。

「若くはねえが・・・まあ40前後ってところだろ、肌が白くて透き通っていて、鼻が低くくて、全体に丸顔で頬が紅くって・・・。」

「なんだ、それじゃおかめじゃないか、お前も好きだな、そんなのにキスしたのか？」

「キスしたんじゃない、こっちがキスされたんだ——駅のベンチに酔っぱらって寝てたら、いきなりキスされた。」

日替わりランチのプレートに、箸をおきながらもう一人の男が呟きました。

「酔っぱらってたんだろ、その女も？」

「酔っぱらってたかどうかは、こっちが酔っぱらってたからよく分かんが・・・俺と同じに酔いつぶれて寝てるのが廻りに何人かいてな、片っ端からキスして回ってるようだった。」

「ほら見ろ、やっぱり酔っぱらってんじゃねえか、中年の女が酔っぱらうと男よりたちが悪いんだ——それで、お前どうした？」

「何だか、急に酔いが醒めちまってな、家に帰ろうと起き上がって周りを見回すと、同じようにキスされた酔っ払いたちがもくもく起きてきた、みんなバツが悪そうな表情で顔を見合わせたんだ。」

煙草をくわえ、灰皿を引き寄せながら男が答えます。

「その時、女はまだいたのか？」

「いたね、何だか気味の悪い薄ら笑みを浮かべて、そのまま改札通っていなくなった・・・。」



②【9月22日、斉性会福岡総合病院救急医療センター、ナースステーションでの会話。】

「如何したんですか先生？元気が無いですよ。」

朝の巡回が一段落したナースステーションに、当直医師が入ってきました。

疲労困憊な蒼い顔を見て、看護師のひとりが声を掛けました。

「そう見えるかい？無理もない……。」

薄いブルーのクリニックユニフォームのファスナーを下げ、ウォーターサーバーの紙コップを片手に、ベンチに腰を下ろしながら、当直医師が答えます。

「無理もないって？」

「実は、昨夜救急受け入れした患者が今朝亡くなった。その死因がどうにもよく分からないのだ。」

「よく分からない？」

「説明のつく合理性を考慮して“窒息死”で報告したが、一般的な窒息とはかなり状況が違う……。」

「というと？」

「血液中の溶解ガスが、急激に発泡したようなんだ。窒息というより減圧症に近い。」

「減圧症？潜水病のことですか。」

「重要なのは、発泡した溶解ガスが、窒素ではなくて炭酸ガスだったってことだ。患者の血液サンプル中に存在した気泡から判定した、減圧症の症例としてまずあり得ない。」

「どうあり得ないんですか？」

「空気中の血液が減圧されてまず発泡するのは、血液に溶解しにくい窒素からだ、窒素の微小な気泡が、毛細血管に詰まって血行不良を起こすのが減圧症なんだ。窒素に較べたら二酸化炭素は血液によく溶ける、窒素より先に発泡するなんて考えられない……。」

「——つまり、減圧症じゃない？」

「炭酸ガスで飽和状態なら、当然血中の酸素濃度は低い、気泡による血行不良もあって全身窒息状態に陥ってた。緊急にHBO（高圧酸素療法）を行ったが、間に合わなかった。」

「患者は、救急搬入されるまで何をしていたんですか？」

「救急隊の話じゃ、中洲で飲んでいたみたいだ、急に意識を失って倒れたらしい。だから、最初は急性アルコール中毒の対応を考えていた、ところが搬入された患者のバイタルを見て、これは違うと思った、アルコール中毒は脳疾患だから今回のような全身チアノーゼは発症しない、それにアルコールの匂いが全くしなかったんだ——。」

その時、大慌てで若い医師が飛び込んできました。

「ドクター！救急搬入です、昨夜と同じバイタルです！」

紙コップの水を勢いよく飲み干し、両手で顔を叩いてナースセンターを飛び出していきました。

### ③【9月26日、旭日ビール博多工場、タンク破裂事故時の貯酒タンク作業員の会話。】

「今日は3人病欠か？昨日も二人休んでたが、残暑の名残の夏風邪か？」

「――咳と鼻水が酷いって言ってます、熱は大したことないようです。そんな事よりチーフ、第5と第8タンクの内部圧力が高いんですが……昨日と同じ状況です。」

若い作業員が、鶯色のオペレーションパネルのゲージを見ながら声を上げます、ノートパソコンのキーボードの間を飛び跳ねていた男の指が止まりました。

「また異常発酵か？昨日は第3と第7だったな――リリーフバルブ（減圧弁）は大丈夫だろうな。」

背後の大きな硝子窓から、巨大な貯酒タンクの銀色の列を見上げながら、チーフと呼ばれた初老の男が呟きました。

タンクの間を縦横に走る細いパイプの終端から、白い蒸気が立ち昇っています。

「念のため様子を見て来よう、一緒についてきてくれ。」ヘルメットの顎紐を締めるのももどかしく、二人はオフィス建屋の階段を駆け下ります。

外に出た途端、いつもと違う強い醗酵臭に互いの顔を見合わせました、思わず足が速歩になります。

貯酒タンクに繋がるメンテナンス用キャットウォークに駆け上がると、ブルーグレーの作業服の一団が、血相を変えて駆けてきます。

「チーフ、大変です！第8タンクの配管が破断しました、若ビールが溢れて襲ってきます！」

エキスパンドメタルの床を見下ろすと、直下の地面を薄い琥珀色の液体が所々白い泡を起ち上げながら、濁流となって流れていきます。

タンクに囲まれた谷間から、今度は巨大な泡の山が、見る見るキャットウォークを飲み込んで迫ってきました。

「退避！全員退避！」

その叫びをかき消すように、すぐ隣の5号タンクの外壁に裂け目が入り、激しい空気の振動とともに、白い濃厚な泡が一気に噴出して、周りの全てをビールの泡で蔽ってしまいました。



④【9月27日、シーサイド百道、ビジネス街カフェテラスでのサラリーマンの会話。】

長い夏の熱気も、ようやく落ち着き始め、空気が色が清々しく秋めいてきた昼下がり、ビルの谷間の小さなカフェテラスで、二人のサラリーマンが食後のコーヒーを楽しんでいます。

「宴会好きのお前が、今晚欠席するなんて、珍しいな？」

「体調が悪いんだ、一週間前から咳と鼻水が止まらん、夏風邪こじらせたかも知れん。」

「お前のことだから、アルコール補給すりゃ治るんじゃないのか、——熱はあるのか？」

「それが変なんだ、好きだから毎晩日本酒で晩酌しているんだが、いくら飲んでも酔わない、まるでサイダー飲んでるみたいでゲップばかり出る、胃の下の辺りがカッカと熱くなっていい気分じゃない、そのうち下腹部がぐるぐる動き始めてトイレに駆け込む、その繰り返しだ。」

「それが今年の夏風邪の症状じゃないのか？——診てもらった方がいいぞ。」

「咳と鼻水以外の症状は、酒を飲んだ時だけなんだ、酒を飲んで辛い思いをするのは初めてだ……。」

「そういえばお前、二日酔いの経験が無いって言ってたな……。」

【私は、10年前二人の子供を交通事故で亡くしました、同じ小学校に通う仲のいい双子の姉妹でした、親馬鹿ではありますが二人とも成績優秀で、明るく、人の面倒見も良くて、クラスメイトから慕われる存在でした。

その日、下校途中の坂道で、カーブを曲がり切れずにスピンした黒い大型のSUVに、二人とも跳ね飛ばされたのです。

運転者は酒を飲んでいました。



夫に支えられ、子供の葬儀を挙げ、加害者の公判に立ち会い、判決が確定して収監されるのを確認するまで、自ら生きて生活した明瞭な感覚はありません。

記憶の中の子供と、はっきり向き合う勇気が無かったのです。

”子供は鎚“とはよく云ったもので、夫とは2年後に離婚いたしました。

友人に勧められ、同じような境遇の母親たちのグループに入り、飲酒運転撲滅活動に身を投じたのです。

乞われるまま様々な場所で話をし、自らの思いの丈を、市井の人々にぶつけてまいりました。

されど、この地の飲酒運転は一向に減少する兆しを見せません。

本来、取り締まるべき司法・行政に身を置く方々にも、飲酒運転で検挙される事案が散見される有様です。

同じような苦しみに苛まれる母親を増やさない為、小さな命を健やかに育む為、必死で話をしてきたつもりなのですが・・・。

———そしてある日、私はひとつの真理に気が付きました。

私の話を聴いて、署名簿に署名して帰った方が、二日後に飲酒運転で事故を起こされたのです。

同僚のお母さんたちにも、大なり小なり同じようなケースがあったようです。

つまり、酒を飲んで運転をされる方も、話を聴いて飲酒運転の悲惨さに理解を示し、飲酒運転撲滅に賛同されるのです。

車の運転をするまさにその瞬間にのみ、酒を飲んでいるという意識がなくなる・・・人が歩くとき手足を交互に出す様に、無意識の行為なのです。

だったら、飲酒の自覚を常に持ち続けられるようにしてやれば良いのではないか、自覚を持ち続け得ないとすれば、車の運転に支障がないようにしてやれば、更に良いのではないか。

——私はその時、そう思いました。そして或る計画に沿い、信念を持って法を犯そうと、決意したのです。

私の本業は分子生物学、特にウィルスの核酸に関する研究を、ある企業のラボで20年以上続けています。

レトロウィルス科の、ある種のウィルス（病原性の無い）が、人の消化器の粘膜細胞に、特殊な効果を生じさせる事例を発見したのは、子供が事故で亡くなる2年前のことでした。

当時実験による再現が難しく、論理的な説明も出来ないため予算がつかず、ラボの研究テーマとしては、お蔵入りとされましたので、研究資料を引き取って、個人的に当該ウィルスの研究を継続して進めることにしました。

そして**RNA**のゲノム編集によって、その特殊な効果の顕在化に成功したのです。

多くの生物は一般的に、有機物を様々な酵素（タンパク質）を使って酸化分解（呼吸の場合、水と炭酸ガスに分解）し、遊離エネルギーを利得して生命活動を維持しています。

私たち人間は、特に炭化水素の酸化分解に関しては、専ら肝臓と筋肉にその機能を割り当てていますが、当然ながら体を構成する全ての細胞の**DNA**に、その情報が書き込まれています。

当該ウィルスは、自らのRNA逆転写酵素を使って、感染侵入した細胞のDNAを一部書き換えます。

結果として感染した組織は、炭化水素酸化分解機能が活性化され、第二の肝臓・筋肉として活動を始めます。特にヒドロキシ基を持つ炭化水素（アルコール等）に対しては、肝臓・筋肉での酸化より遥かに高効率で、アセトアルデヒドや酢酸の中間生成も必要とせず、一気に水と炭酸ガスまで分解が進みます。

人が口腔から当該ウィルスに感染した場合、口腔・食道・胃・十二指腸・小腸まで拡大しますが、感染速度と粘膜の新陳代謝とがバランスして、それ以上感染は進みません。



生命活動に障害となる他の作用（毒性）もありませんので、感染した個体（人間）はそのままウィルスと共存して、生涯を全うします。

また、何らかの理由でウィルスが死滅した場合も、宿主細胞のDNAが書き換えられていますので、その機能は生涯保持されます。

感染した人間がアルコールを摂取すると、まず口腔から分解が始まります、食道、胃へと進み、水と炭酸ガス、多少の分解熱を発生させながら、小腸に達しアルコールの分解が完了します。

血液中にアルコールが出現することは、殆どありません。

従って、アルコールによる脳麻痺・神経作用の可能性が無くなり――。

つまり、当該ウィルスに感染した人間は、生涯酒に酔えなくなります。

人から人への感染経路は、口唇粘膜どうしの接触感染と、唾液の飛沫感染に限られます。（ただし、排泄物や吐瀉物からの経口感染の可能性も、完全には廃除出来ません。）そこで私は、まず私自身に当該ウィルスを感染させ、鉄道の酔客の唇に接吻することで感染を拡大させました。

五日間に渡り、深夜の電車内・駅のベンチの泥酔客、男女合計56名に唇を重ねて参りました。

真夜中のことで、私自身も酔客と思われたのか、幸い咎められることもなく計画を遂行することが出来ました。

ただ一人だけ、しつこく唇を吸い続ける老女には閉口いたしました。

概して女性の酔客の方が、積極的に唇を吸い返してくるようです。

私の計算によると、約5年間で日本中の人間が感染いたします。

感染拡大を停めることは出来ません。

勿論、意図的に他人をウィルスに感染させる行為は、たとえそれが病原性のない無害なものであっても、違法行為です。

そして更に、私は取り返しのつかないミスを犯してしまいました。

学生時代からの友人の、看護師の勤め先で、一週間前原因不明の減圧症で救急患者がひとり亡くなりました。内容を問い詰めて訊きますと、勤務先・住所・年齢から、どうやら私が感染させた酔客の中のひとりのようです。

アルコールの分解により胃で発生した炭酸ガスは、殆どおくび（ゲップ）として口から排出されますが、小腸で発生したものは、特に大腸の機能が著しく低調（便秘等）な場合、腸壁から吸収されて血液に溶け出します。飲んだ酒の量にもよりますが、それによって血中の炭酸ガスが飽和状態になった可能性はあります。

私がキスして回った酔客の素性は、ある程度調べていて、リストも手元にありますが、そこまでの病理的な背景までは、調査が行き届いていませんでした。

私は、その患者様の死に責任を負わなければなりません。

それは、私の娘たちの死に対して、収監された運転者が負う責任と何ら変わりません。親から相続した私の全ての資産を、別に認めてあります遺言の通り、今回の患者様を始め、今後発生する当該ウィルスよる人的損害の補償とさせて頂きたいと思えます。せめてもの償いのつもりです、どうか宜しく御計らい下さい。

今、私の枕元には、点滴キットと臭化パンクロニウム（筋肉弛緩剤）、チオペンタール（麻酔薬）の安ぷルが置かれています。

薬学に僅かでも知識のある方なら、私が何をしようとしているのか、お分かりだと思います。

余談ではありますが、当該ウィルスの感染宿主として、人の消化器粘膜細胞以外にも、酵母菌とシュードモナス属細菌の感染を確認しております。

シュードモナス属とは、いわゆる石油分解細菌の一種で、海水中に多く存在します。私のいない、明日からのご参考までに・・・・・・・・・・。】



⑤【9月28日、福岡県警中洲警察署、刑事課会議室での当直担当刑事2名の会話。】

「以上が、仏さんの遺書だ。資産の遺言書や感染させた酔客のリストと一緒に、現場の自宅マンションの部屋のパソコンの中に入った。」

「遺書があるなら、事件性は無いですね、我々の出番じゃない・・・・・・・・。」

「バカヤロ！感染がこれ以上拡大したらどうするんだ！県の担当部署に遺書の内容を紹介して、我々はリストに挙がっている酔客に明日から事情聴取だ！」

「でも、病原性は無いんでしょ・・・・・・・・たとえ、有害なウィルスでも、感染症は警察の仕事じゃないですよ。」

「バカヤロ！ほんとに分からん奴だな、日本中から酔っ払いがいなくなったら警察はどうなるんだ、派出所や駐在所で頑張ってる若い連中の仕事はどうなるんだ！――少しは考えて行動しろ。」

薄暗い刑事部屋の窓の、ベネシャンブラインドの隙間を透して、歓楽街の喧騒が浸入してきます。

当直の二人の刑事は、この賑わいがやがて息を潜める現実には、お互いの意識を奪われている様子でした。

⑥【9月30日、博多湾沿いのガソリンスタンド、台風一過、給油スタッフ3名の会話。  
】

「ひどい台風だったな、昨夜は。」

「海側に防火塀が無いから、そこらじゅう海水だらけですよ。」

「ちゃんと水で潮を落としといてくれよ、そのままだと設備が錆びるぞ。」

海沿いを走る国道沿いのガソリンスタンドは、早朝から台風の後始末に追われていました。

「それでどうだった？昨日ランチクルーズ、行ったんだろ？」

「ひどいクルーズでしたよ・・・午前中は博多湾、穏やかに凪いでいたんですけど、昼過ぎから急に波が出てきましてね、みんな船酔いで我慢しきれずに、船縁から海へ・・・。」

「――豪華なランチ全部海に吐いちゃった！」

「乗ってるお客さんみんなそうでしたよ、大丈夫だったのはうちの女房くらいのもので・・・。」

「そりゃ大変だった、事前にキャンセルにはならなかったのか？」

「丁度、この辺りの沖でしたよ、アナウンスで“波がひどくなったから以降のクルーズをキャンセルして、港に引き返しますって”・・・もうちょっと早く言ってくれりゃいいのに。」

その時、三人目のスタッフが慌てて二人に駆け寄ります。

「店長！台風の被害です、通気管が倒れています！」

見ると、5本ある通気管が5本とも根元から折れて穴が開いています。

「何か風で飛ばされてきて、当たったんでしょうか？」

「まずいな、地下タンクに海水が入ったかもしれん。店開けるのを遅らせて、すぐ点検しよう。」

事務所建屋の、従業員室にある監視盤を見てきたスタッフが、大声を上げて飛び出してきました。

「店長！タンクの圧力が――。」

その時、破損した通気管の穴から白い蒸気が吹き上がります、同時に床の鑄鉄製のマンホールが吹き飛んで――。

「逃げろ！爆発するぞ！」

30m程走った辺りで振り返ると、泡を含んだ巨大な水柱が青空高く立ち上がり、スタンドの屋根を水浸しにしています。

「何だ？ガソリンの匂いがしないぞ！」



「店長、これ炭酸水ですよ！タンクのガソリンが、みんな炭酸水に変わっています！」  
頬を伝う水滴を、口に含んだスタッフが、大声を上げました。

おわり。



以上、すべてフィクションです。

実在する、人物・団体・施設・企業、及び現実の事件・事故・裁判等とは一切関係ありません。  
飲酒運転の不幸に関し、ひとつだけ述べさせて頂けるなら、“人の良識に過度の期待を抱いてはいけ  
ない”ということです。

人の良識を啓蒙するだけではなく、どうすれば必要なとき、飲酒の作用を抑え込めるのか、科学  
は模索すべきです。

物理的な歯止めをかけるべき時期ではないかと考えます。

ベンチの貴方に優しくキスして . . . .

<http://p.booklog.jp/book/109341>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109341>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109341>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ